第１２回岡高フォーラム「高齢社会の救急医療」

岡崎市民病院名誉院長　木村次郎氏

令和元年９月２１日(土)午後１時半より葵丘にて、岡崎市民病院名誉院長木村次郎氏(岡高２３回卒)を講師として開催された。参加者約 65 名。氏は、1977 年に岡崎市民病院に就職して現在に至る 42 年のうち 39 年間、岡崎市民病院など岡崎市内の病院で勤務された。演題は「高齢社会の救急医療」で講演要旨は以下のとおりである。

はじめに、岡崎市民病院における高齢者の救急医療の概要を説明する。岡崎市民病院の救急外来では年間 2 万 6000 人以上の患者うち 1 万件以上が救急搬送患者である。75 歳以上では循環器系(心不全など)、外傷(骨折など)、呼吸器系(肺炎など)、消化器系(胃腸炎など)の順で患者が多い。また、救急外来から直接入院する病気としては肺炎、心不全、脳梗塞、下肢骨折の順で多い。ただし、急性期対応病院なので平均在院日数は 12 日、（入院加療が）更に必要なら次の病院に移って（治療して）いただくことになる。

次に、高齢者の救急疾患の特徴を説明する。血管系の有病率が高い、軽微なことでも重症化しやすい、社会復帰に時間を要する(復帰できないことも)、入退院を繰り返し、救急医療と終末期医療とが混在している、多数の病気を抱えており、多数の薬を服用している、熱・痛み・頻脈などの症状が出にくく訴えが不明なことがある、独居・貧困・老老介護などの社会的問題を抱えていることが多い、といったことが高齢者の救急疾患の特徴だ。

続いて、高齢者に多い救急疾患の概略を説明する。まず、肺炎で高齢者に特徴的なのは誤嚥性肺炎やインフルエンザ性肺炎であり、近年高齢者の結核が増えている。次に心不全の多くは慢性心不全の急性増悪で、これは心筋梗塞などの病歴が感染症や過労などにより急に悪化するものである。次に脳梗塞。意識障害、麻痺、視力障害、めまい、呂律障害などがでたら急いで救急車を呼ぶこと。高齢者の骨折では大腿骨のほか、上腕骨、脊柱、手首などが多い。高齢者のガンでは、進行し緊急事態になって初めて受診するケースが多い。

最後に、元気に楽しく暮ら方法。まず、救急車にお世話にならないためには、生活習慣に気をつけ血管を悪くしない、よく噛んで飲み込む、歩いて骨を丈夫に、かかりつけ医を持ち年に一度検診を受ける、ことなどが大切だ。また、救急車にお世話になる時のための準備をしておくことだ。自分の医療情報をまとめ救急隊や救急病院にわかるようにしておくことが重要だ。また万が一の時のための生前の意思表示(リビング・ウィル)をつくっておくことで医療者や残された家族に安心感や満足感を与えることができる。

年取ることは仕方がないが備えあれば憂いなし、ということである。

文責　磯谷正行（高 28 回）